

状況展開催についての一考察

—制作活動における学生の意識の変容について—

(美術教育講座) 佐々木昌夫・原田義明・千代田憲子
福井一真・秋山敏行

A consideration about the holding of the JOKYO exhibition
—About transformation of the consciousness of the student in the creative activity—

Masao SASAKI , Yoshiaki HARADA , Noriko CHIYODA ,
Kazuma FUKUI and Toshiyuki AKIYAMA

(平成 30 年 6 月 29 日受理)

1. はじめに

1-1. 状況展の目的

(1) 状況展の底流

状況展は愛媛大学教育学部美術教育講座の有志により、2015年から2017年にかけて毎年開催した美術の展覧会である。第一回の「状況 2015」展の募集要項には、当時の状況展実行委員長の大学院生が次のように書いている。

この「状況 2015 展」は、造形芸術コース・美術教育専修の学生と教員の有志による作品展です。本展は日頃から制作に取り組み、それぞれの状況の〈いま〉を形にすることにに対して全力で挑戦し、失敗も成功も含めて次の一歩へとつながる作品を展示することを目的としています。

第二回「状況 2016」展と第三回「状況 2017」展の実行委員長も、それぞれほぼ同じ趣旨の文章を募集要項に書いている。ここで重要なことが 2 点挙げられるだろう。一つはこの文章の前半にある「有志」という言葉で表現されているように、この展覧会に参加することは言うまでもなく、作品の内容や完成度も含めて、各自の〈自由意志〉に任されていること。二つ目は、後半部分の「全力で挑戦し、失敗も成功も含めて次の一歩へとつながる作品を展示する」という箇所が挙げられる。つまりここ

では、単に作品の質のみを問うのではなく、学生・教員の立場にかかわらず、各自の容量の全てを出し切ることが求められている。過去の自作品の模倣に甘んじるのではなく、常に自分の持てるものを総動員しなければならない、ギリギリの場所としての〈創造の現場〉に立ち、自分の領域を一歩踏み出すことを、表現者の誠実さとして意識することである。状況展の底流では、〈自由意志〉により〈創造の現場〉に立とうとする意志が問われていると言えよう。

(2) 「アンデパンダン」展

ところで、この〈自由意志〉と〈創造の現場〉という言葉から想起される展覧会として、1957年から1991年に京都市主催で計 31 回実施された「京都アンデパンダン」展が挙げられる。1991年の「京都アンデパンダン」展のパンフレットによると、

「アンデパンダン Independent」とは、フランス語で「自立した、独立した」という意味で、本展の特徴は、文字どおり独立無鑑査制、既成の概念にしばられることなく、自由に自らの芸術を発表できることにあります²⁾。

とある。状況展とは事情の異なる規模の大きい全国公募の展覧会だが、ともに独立無鑑査制ということが共通し

ている。それ故、〈自由意志〉に任せられて〈創造の現場〉に立つことを問われることにおいては、同じ方向を向いていると言えないか。一方で「アンデパンダン」展は、ややもすれば〈自由意志〉を履き違えて、弛緩した作品による形骸化の危険性をはらんでいる。実際「京都アンデパンダン」展も、31回の歴史の過程で年々そのような傾向が強くなっていったと言えなくもないし、状況展もまたそのことから免れないであろう。しかしながら、言わば末期にあたる、筆者（佐々木）も参加していた80年代後半の「京都アンデパンダン」展においても、意識のある様々な人たちが、〈創造の現場〉に立とうとしていたこともまた事実であろう。そこでは、いかにも日曜画家が描いたような素朴な風景画の前を、太い鉄線で編まれた鎧のようなものを全身に身につけた人物が、生きた彫刻と称して歩いていた。また、すでに評価されているベテランの美術家の、綿密に計算された大がかりなインスタレーションのすぐ隣に、まるで子供の工作のように稚拙ではあるが、粗野なエネルギーにあふれた学生の作品が散らばっていた。会場の京都市美術館の中で、経験や立場が異なり、様々な異なる考えを持った他者たちが、それぞれの方法で〈創造の現場〉に立とうとし、奮闘していたのである。

かつて京都市美術館学芸員だった井上明彦は「京都アンデパンダン」展について次のように言う。

アンパンは、無秩序や雑音、錯誤と共に機能する。

（中略）過ぎ去ったはずの手法が亡霊のように立ち現われ、新しい実験と錯綜し合い、衝動と思いつきがバッコする（過去は死なず、衝動なき創造はなく、思いつきがその人を変えてしまうかもしれないのに、どうしてそれらを排除できよう）。退行と反復、未然のかたちを排する者には、この展覧会とつき合っていくことはむずかしい³⁾。

例え錯誤と退行にまみれた他者であれ、その者が〈創造の現場〉に立とうとするかぎり、排除してはならない。一見、カオスの様相を呈し、各々が他者の作品に無関心に見えるようではあっても、そのカオスの中で、他者の眼差しが無意識にそして複雑に交差している。〈創造の現場〉に真摯に立とうとすればするほど、自分の領域としての自作品に向けられる他者の眼差しによって、否が応でも自作品に対する疑いが喚起され、それがまた次の思

考と創造へ向かうのではないだろうか。柄谷行人が、「疑うこと、そして疑う主体性は、現実的に存在する差異、あるいは他者性から来るのである」⁴⁾と言うように、自分の領域を脅かす異なる存在としての他者が、疑うことを喚起するのである。

(3) 芸術が生成する場所

柄谷行人はカントの芸術論について次のように言う。

彼は一方で、芸術性が客観的な対象にあることを疑い、他方でそれが主観性（感情）にあることを疑っている。彼がもたらす主観性は、むしろこの疑いにあり、それはたえず規範化される芸術を、芸術を芸術たらしめる原初の間にもどすのだ。カントが認めないのは、美的領域が、客観的であれ主観的であれ、それ自体で存在するという考えである⁵⁾。

芸術は規範化されたそれ自体の存在ではありえず、疑うことによって初めて芸術が生成するというわけである。だとすれば、他者の眼差しが交差し、自分の領域としての自作品に対する疑いが喚起される「アンデパンダン」展でこそ、芸術を芸術たらしめる原初の間が現前すると言えないだろうか。立場の異なる制作者の他分野の作品が、同じ場所にあるとき、その他者の作品により自分の作品を疑う契機が与えられるかもしれない。そして、その疑いこそ、芸術を生成させる可能性をはらんでいるのである。

ここで注意すべきことは、他者と向き合うとき、誤って他者を自己の延長として扱う危険性が常に潜んでいることだろう。誰もが予め未来の実現像を思い描いて行動するものではあるが、他者が思い通りにならず未来の実現像からぶれていくときには、予定調和的な未来の実現のために、他者を抑圧あるいは排除する傾向がある。そのような局面に陥るとき、疑うことはできないし、芸術も生成することはない。全3回の状況展においても、その危険性が遍在していたことは言うまでもないだろう。状況展もまた「アンデパンダン」展であり、学部生・院生・卒業生・教員という異なる立場の制作者の様々な分野の作品が、同じ場所に並ぶ、他者の眼差しの交差する展覧会であった。その展覧会が先の危険性を避けて、芸術が生成する場所となっていたかどうかは、ひとえに参加者が、〈自由意志〉によって〈創造の現場〉に立てたかどうかにかかっているとさえ言えないだろうか。自分の〈自

由意志)で、持てるものを総動員しなければならない(創造の現場)に立つということは、自ら望んで、自分の領域を越えたものに直面することでもある。そして、そのような自分の領域を越えた外部にこそ真の他者は現れ、規範化された芸術や自分の作品を外部において疑うことによって、芸術の生成する場所が現前するのではないだろうか。状況展の(状況)とは、参加者それぞれの現在の(状況)のことであると同時に、固定された自分の領域の外部に出ようとする、様々な可能性を内包した動的な自分の(状況)にほかならない。

1-2. 状況展の概要

全3回の状況展は、愛媛大学教育学部美術教育講座の有志が、企画・運営および作品を出品した。その展示内容は、伝統的技法や現代的手法を様々に駆使した、絵画・彫刻・レリーフ・テキスタイル造形・ビジュアルデザイン・イラストレーション・鋳金・陶芸・ガラス工芸・木工芸等の多彩な作品による創造的空間の構築をめざした。

「状況2015」展

出品者：学部生6名 院生2名 教員6名

会場：ルーチェベルデ・オープンスペース

日時：2015年12月6日(日)～2015年12月19日(土)

12時～19時／金曜日休み

観客数：148名



写真1：第一回展の様子

「状況2016」展(前期)

出品者：学部生6名 院生1名 卒業生1名 教員3名

会場：ルーチェベルデ・オープンスペース

日時：2016年11月28日(月)～2016年12月11日

(日)12時～19時／12月2日(金)・12月7日

(水)・12月9日(金)休み

観客数：113名



写真2：第二回展の様子

「状況2016」展(後期)

出品者：学部生7名 卒業生2名 教員3名

会場：ルーチェベルデ・オープンスペース

日時：2016年12月12日(月)～2016年12月25日

(日)12時～19時／12月14日(水)・12月16日

(金)・12月21日(水)休み

観客数：74名

※「状況2016」展は、会場の展示面積に対して出品作品が多数のため、2会期に分けて開催した。

「状況2017」展

出品者：学部生12名 卒業生4名 教員6名

会場：愛媛大学ミュージアム(企画展示室・多目的ルーム)

日時：2017年11月24日(金)～2017年12月10日

(日)10時～16時30分／火曜日休み

観客数：862名



写真3：第三回展(愛媛大学ミュージアム)の様子

会場：愛媛県美術館(特別展示室2・3)

日時：2017年12月20日(水)～2017年12月27日

(水) 9時40分～18時／月曜日休み

観客数：645名



写真4：第四回展（愛媛県美術館）の様子

※「状況 2017」展は、愛媛大学ミュージアムと愛媛県美術館の2会場を巡回した。また、終了後、展覧会カタログを作成および発行した。

1-3. 本稿の目的

状況展は上述の通り学生・教員の立場にかかわらず出品者それぞれの〈自由意志〉による〈創造の現場〉に立ち上ることを問う展覧会である。教員が学生の出品を促すことや、授業課題のように直接的な指導を控えており、大学における教育的な活動とは切り離された展覧会である。とはいうものの、4回生であれば本展の後には卒業制作展が控えているなど、制作活動がその後も継続されるのは言うまでもない。つまり、本展への参加が制作される作品や姿勢などに良くも悪くも影響を与え、出品者の意識や制作活動に変化を認めることができるのではないかと考えられる。そこで、本稿では、大学での教育において、正課外での展覧会の機会が増えることによってもたらされる学生の意識の変容を検証することを目的として、状況展に参加した「学生」（卒業生も含む）26名に対してアンケート調査を行い、その意識の変容を探るとともに、「教員」の立場からみた本展覧会が与える「学生」への教育的効果について考察を行った。

2. アンケートの概要と集計結果

2-1. アンケートの概要

状況展の教育的効果を検証するため行ったアンケートは、2018年4月に記名式で実施した。質問は状況展出品の動機から、準備、会期中の展示、会期後の振り返りに関する、選択式7項目と自由記述式5項目で、26名中

24名が回答した（回答率92.3%）。なお、回答者のうち「状況 2015」展出品者は8名（学部生6名・院生2名）、「状況 2016」展出品者は15名（学部生12名・院生1名・卒業生2名）、「状況 2017」展出品者は16名（学部生12名・卒業生4名）であり、2回出品した者は9名、3回すべてに出品した者は3名いる。

2-2. アンケートの集計結果

集計結果は次の通りである。なお紙幅の都合上、自由記述回答の同意見はまとめて簡記した。偶付き括弧内の数字はアンケートの項目番号を表す。

(1) 状況展出品を決めるまで

【1】状況展への参加に迷いはなかった

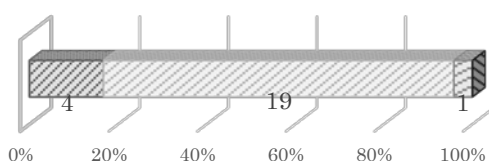


図1：設問1の回答内訳

【2】状況展へ参加した理由（選択式・複数回答可）

- ・制作へのモチベーションをあげるため（18名）
- ・作品発表の場が欲しかったため（16名）
- ・なんとなく楽しそうだったので（9名）
- ・卒業制作へのステップアップとして（7名）
- ・教員とともに作品発表ができるため（7名）
- ・周りが参加していたため（2名）
- ・卒業制作とは違うものへチャレンジするため（2名）
- ・授業とは違うものへチャレンジするため（1名）

以上のように、状況展出品者のほとんどが、すぐに出品を決めたと回答している。そしてその動機は制作意欲に関わるものが多かった。周りが参加していたためと回答した学部生もいたが、二人とも制作のモチベーションアップも動機として挙げており、自ら望んでいなかったわけでは無い。また大学外での作品発表の場を多くの学生が望んでいたことが分かる。

(3) 状況展準備について

【3】状況展の準備には積極的に参加した

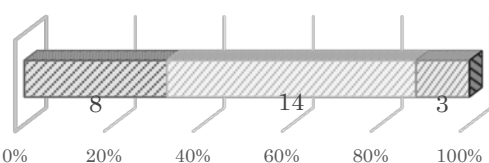


図2：設問3の回答内訳

【4】状況展の準備に参加してよかったこと（【3】で参加したと答えた22名を対象・自由記述式・複数回答可）

- ・展示のやり方やプロセス、必要なものを学べた（16名）
- ・卒業制作展で役立った/シミュレーションができた（10名）
- ・他分野の展示も手伝えた/色んな人と話せた（2名）
- ・先生に展示方法の疑問点を直接聞いた/アドバイスを貰えた（2名）
- ・各人の展示へのこだわりや試行錯誤を見ることができた（1名）
- ・グループ展の運営を学び、その面白さや難しさを知れた（1名）
- ・芳名録と送付のやり方を学んだ（1名）
- ・挨拶文の構成について、深く考えるようになった（1名）
- ・自分で企画、展示をすることでデザイン力やディレクション力を磨けた（1名）
- ・ポスターやDM、チラシの作成に携わりデザイン力向上とともにスケジュール管理も学べた（1名）
- ・将来個展をする際の準備を学べた（1名）

【5】状況展の準備での反省点や改善点（自由記述式・複数回答可）

- ・学生間、学生と教員間の情報伝達不足だった（7名）
- ・事前にもっと自分で調べて準備すべきだった（3名）
- ・事前にもっと助言を求めるべきだった（2名）
- ・大きい作品や展示台の搬入経路を確認すべきだった（1名）
- ・もっと計画的にスケジュールリングすべきだった（1名）
- ・予め人手が必要か考えて手伝いを頼むべきだった（1名）
- ・展示台をもっと早くから用意すべきだった（1名）
- ・展示をもっと工夫するべきだった（1名）
- ・もっと周りの制作経過を見て勉強すべきだった（1名）
- ・在校生に任せきりになってしまった（1名）

状況展の準備に全く関わらなかった学生は皆無であったが、やはり卒業生の多くは準備に積極的に関わらなかったと回答している。なお、学部生の時に積極的に参加したが卒業生として参加ではあまり準備に関われなかったとの回答はダブルカウントしたため、総数が25名と

なっている。

多くの学生が状況展準備に参加したメリットとして、実際に作品展示する方法について学んだことや4回生2月に実施する卒業制作展に備えられたことを挙げた。確かに状況展開催以前は、学外展示に関わる機会が殆どなかったため、多くの学生にとって卒業制作展が初めての展示実践の場となり戸惑う学生も多かった。制作だけでなく展示のプロセスも学べたことは、大学生活の集大成である卒業制作展のスムーズな運営に繋がったであろう。

一方、反省点としてもっとも多く挙げたのは、情報の伝達不足であった。この回答を寄せた学生は全員第3回の「状況2017」展出品者であることから、場所の異なる2会場で最多の出品数（1会場あたり）だった「状況2017」では打ち合わせすべき事項が多かったにもかかわらず、十分に伝達・共有ができていなかったことが大きな要因であろう。また、「状況2017」では、ひとつの会場が愛媛大学ミュージアムであったことから、日程調整だけでなく、予算の執行方法や会場設営のための打ち合わせなどは全て教員が行う必要性が生じた。結果的に、展覧会準備に関して教員が先導する形となり、準備に関して学生が受け身に回らざるを得ない状態を生んでしまった。専門キュレーター不在の状況展では、教員と学生という立場にかかわらず出品者全員が表現者であると同時に、全体像を把握し展示・運営を実現するキュレーターの役割を等しく担っていくことを前提としていたにも関わらず、教員が準備を先導してしまったために、表現者でありキュレーターであるという意識を学生の中に形成できず、教員と学生の間に意識のズレが生じたといえるだろう。それだけでなく、普段の制作スペースも各分野で異なるために制作途中での情報交換ができなかったことや、普段LINEグループやツイッターなどのSNSで連絡し合う学生と、教員の間に所謂デジタル・デバイスが生じていた可能性もあり、参加者全員で情報を伝達・共有する方法にまで意識を向けることができていなかったことが、学生と教員との意識のズレに拍車をかけたといえるだろう。まずは情報伝達手段を確認、統一化し、全員が展示・運営に関わり作り上げることを周知することが今後の予防策となるのではないだろうか。

(3) 状況展会期中について

【6】状況展の会期中の運営に積極的に参加できた

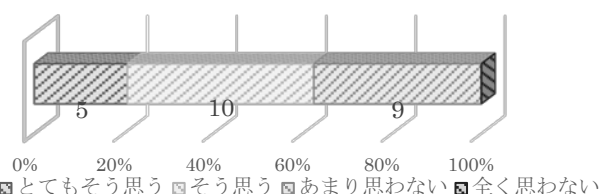


図3：設問6の回答内訳

【7】作品展示で何らかの成果や学びはありましたか

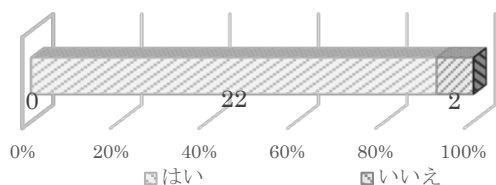


図4：設問7の回答内訳

【8】具体的にどんな成果や学びでしたか（【7】ではいと回答した22名が対象・自由記述式・複数回答可）

- ・作品の見せ方〔高さ・照明など〕を知った/考えた（7名）
- ・より理想に近づける制作意欲がわいた（4名）
- ・一般の鑑賞者の目を意識できた/鑑賞した方の意見を聞くことができた（4名）
- ・教員や友人の作品や展示を実見して刺激を受けた（5名）
- ・自分の作品/やりたい事を見なおす機会になった（3名）
- ・展示空間全体を意識することを学んだ（3名）
- ・制作過程で新しい方向性を見つけた（1名）
- ・水を使った展示の困難さを知った（1名）
- ・計画通りに進める困難さを知った（1名）
- ・新しいことに挑戦でき自信がついた（1名）
- ・自分の表現を追求できた（1名）

作品展示に関しては、9割以上の学生が何らかの成果があったと回答した。その内容は、自らの制作やモチベーションに関するものだけでなく、作品の展示（見せ方）に関するもの、展示空間の使い方に関するもの、他人の作品を間近で見たことに関するもの、来場した鑑賞者に関するものなど、少なからず他者の眼差しを意識した意見であった。また、自分の作品を俯瞰的に見直した旨の回答もあった。

(4) 状況展会期後の振り返り

【9】状況展後の制作活動に影響があった

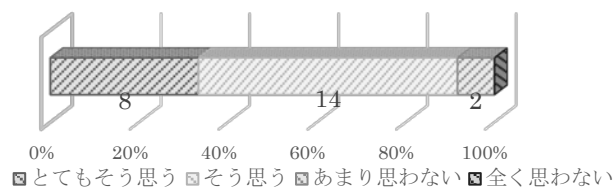


図5：設問9の回答内訳

【10】具体的にどんな影響でしたか（【9】で影響があったと回答した22名が対象・自由記述式・複数回答可）

- ・展示空間/見せ方をより意識しながら制作するようになった（6名）
- ・制作へのモチベーションがより高まった（6名）
- ・これまでと違う素材にも関心を持つようになった（3名）
- ・作品発表の場をこれからも持ちたいと思うようになった/実際に他のコンクールに出品した（3名）
- ・制作のスケジュール管理を意識するようになった（3名）
- ・自分の作品や、制作を続ける理由について考えるようになった（2名）
- ・卒業制作にむけて追及すべき点を認識できた/意識が高まった（2名）
- ・常に頭の中で制作を意識するようになった（1名）
- ・自分の作品により向き合う必要性を感じた（1名）
- ・他の作家と話して自分の制作を省みることができた（1名）
- ・制作の際に作品から離れて観る時間が増えた（1名）
- ・「使う」だけでなく「見る」ための作品デザインを意識するようになった（1名）
- ・刺激を受けるため他の人の作品をより観るようになった（1名）
- ・専攻分野の可能性に気づき新たな発想を得られた（1名）
- ・これからも制作を続け、挑戦し続けることが大切と思った（1名）

【11】状況展のような機会に参加したいか（理由[自由記述式・複数回答可]も併せて）

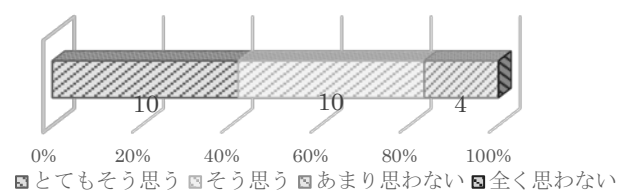


図6：設問11の回答内訳

「とてもそう思う」「そう思う」の理由

- ・作品発表の機会が欲しい（8名）
- ・制作するよい刺激/機会だから（6名）
- ・教員や友人の作品を見て刺激を受けたい（2名）
- ・今の自分を見せる場になる（2名）
- ・自分の作風の変化に興味がある（1名）・絵を描きたい（1名）
- ・知人や教員に再会できる（1名）
- ・他の人の今の作品に興味がある（1名）

「あまり思わない」の理由

- ・余裕が無い（4名）
- ・制作スペースがない（1名）

【12】状況展についての意見・感想（自由記述式）

- ・このような展示を長く続けてほしい（4名）
- ・よい経験/勉強になったと思います（2名）
- ・一つの作品展を作り上げる難しさや楽しさを経験できました（1名）
- ・自分の作品を外部の人に見てもらう機会はとても嬉しく楽しかったです（1名）
- ・本気で作る場なのでとても楽しいです（1名）
- ・刺激的で楽しかったのでできればOBとして参加したい（1名）
- ・後輩にも積極的に参加してほしい（1名）
- ・卒業後も見に行き自分で何かを作るっていいなと感じた（1名）
- ・今後も楽しみにしています（1名）
- ・卒業後の参加は迷ったが、制作について考える機会になり参加してよかった。卒業後も教員や学生と展示の機会があることが、自分の制作や美術教員としてのモチベーションにもつながっていると思います（1名）

状況展後の制作への変化としては、2・3と同じく、制作へのモチベーションや新しい発想だけでなく、作品の展示や見せ方に関連する点が多く挙げられ、状況展を通じて自分の作品を新たな方向から見直すようになったことがうかがえる。学生自身もよい機会となったと感じていることは、【11】の今後状況展のような機会に参加したいかとの問いに83%の学生が「とてもそう思う」「そう思う」と答え、【12】で状況展のような展示が続いてほしいと4名が回答していることから読み取れる。ただし、【11】で「あまり思わない」と回答した4名のうち3名が4回生で時間的余裕のなさを理由に挙げていることは、

今後イコール今年度と考えた可能性が高い。有志の〈自由意志〉による正課外の展覧会として始まったはずの状況展だが、毎年開催されたことでその開催趣旨がうまく伝わらずに、学校行事の一環であるかのような誤解を生む危険性が生まれていたのかもしれない。

本章では、アンケート調査をもとに、学生の状況展および制作姿勢に関する意識のあり方及び変容を紹介した。次章では、学生の制作を実際に間近に見ていた「教員」の視点から、学生の作品とアンケート結果を総合した上での教育的効果について検証していく。

3. 「教員」の視点でみた教育的効果

3-1. ケーススタディA

(1) 愛大学生コンピテンシーについて

愛媛大学では、平成24年（2012年）に「愛媛大学学生として期待される能力～愛大学生コンピテンシー～」⁶⁾（以下、コンピテンシー）を定めた。これは、「愛媛大学憲章」に謳われている「5つの能力」であり、この5つの能力を、Ⅰ. 知識や技能を適切に運用する能力。Ⅱ. 論理的に思考し判断する能力。Ⅲ. 多様な人とコミュニケーションする能力。Ⅳ. 自立した個人として生きていく能力。Ⅴ. 組織や社会の一員として生きていく能力。すなわち、「学生が卒業時に身に付けていることが期待される能力」と定義している。DP（ディプロマ・ポリシー：学位授与方針）が主に正課教育の成果として達成されるものとして設定されているのに対し、コンピテンシーは、正課教育だけでなく、準正課教育及び正課外活動も含めた大学生活全体を通して学生一人ひとりが、人間としてトータルに成長することを支援するという認識の下に策定したものである。⁶⁾

ここでは、コンピテンシーの観点を1つの指標として、学生及び卒業生がこの状況展（以下、展覧会）に参加する中で、展覧会をどのように捉え、どのような意識の変遷があったかを、展覧会後の参加者アンケート調査（別添、状況展参加者アンケート参照）を参考に、工芸専攻学生と工芸専攻卒業生4名を対象として、教育的視点から考察を行った。

(2) 状況展参加者アンケートから

状況展は、2015年から2017年の期間、全3回実施された。この内、今回のアンケート調査で対象とした工芸専

攻学生及び工芸専攻卒業生が参加した展覧会の内訳は、第1回(2015年)参加者1名(出品分野:ガラス工芸)、第2回(2016年)1名(出品分野:陶芸)、第2回・3回(2016・2017年)2名(出品分野:ガラス工芸1名、陶芸1名)である。

アンケートからは、全員が展覧会に積極的に参加したと回答(4名:100%)し、その理由として、○制作へのモチベーションをあげるため(4名:100%)○作品発表の場がほしかった(2名:50%)○卒制へのステップアップ(2名:50%)○教員とともに作品発表ができる(2名:50%)○なんとなく楽しそう(1名:25%)○周りが参加していた(1名:25%)を挙げている。また、展覧会の準備については、4名中3名が準備に積極的に参加したと回答し、具体的には、他分野の展示の手伝いや運営方法等の学びを通して、今後の卒業制作へのステップアップやグループ展の面白さや難しさを体感している。さらに、準備における反省点では、教員・学生間の情報共有や伝達不足の問題を挙げている。改善点については、展示方法の工夫や展示場所の事前確認の必要性等を指摘している。作品展示における成果や学びについては、計画的に制作を進めることの大切さや展示台を含めた展示空間を意識することの重要性を述べている。展覧会後の制作活動への影響については、全員が有意な影響があったと答えている。具体的には、卒業制作展に向けての展示構成への意識の向上。作品のデザインや作品化することへの意識づけ。制作意欲の向上や何らかの形で作品発表することの大切さを挙げている。今後もこのような機会があれば参加したいと思うか、の問いに対しては、4名中3名が積極的に参加したいと答えた。理由として、作品発表の場の必要性や作品制作の刺激になる。制作した作品を多数の人に見てもらいたい機会がほしい。としている。展覧会の全体的な感想や意見では、多くの参加者が教員や先輩、後輩、同学年とともに1つの展覧会を作り上げることの難しさや楽しさを体験し、今後の自身の制作に大きな刺激を与えていることが確認できた。

(3) コンピテンシーの観点から見た状況展の取組み

それぞれの参加者が正課外活動として取組んだ本展覧会について、コンピテンシーの5つの能力と対応させて、以下、教育的な視点から考察を行った。

1) 展覧会を通して、それまで習得した知識や技能を単

に援用するのではなく咀嚼・選択(整理)し、自己の表現へと繋げていく過程が見て取れた。(コンピテンシー: I. 知識や技能を適切に運用する能力)

2) 制作の過程において、最終的に表現したいものを具現化させるため、技術的な失敗を繰り返す中、その結果を論理的・多面的に考察・分析し、自分なりの解決策を見いだしていた。(コンピテンシー: II. 論理的に思考し判断する能力)

3) 展覧会の企画・運営に当たっては、全体として個々人の温度差があったことは否めないが、多くの参加者が準備段階から様々な状況に対応しながら、展覧会という目的達成のため、他者との協働に努めていた。(コンピテンシー: III. 多様な人とコミュニケーションする能力)

4) それまで積み上げた経験や習得した学びを振り返り(リフレクション)、粘り強く自分自身や素材・技法・表現と向き合い、主体的に制作に取り組む態度が確認できた。(コンピテンシー: IV. 自立した個人として生きていく能力)

5) 展覧会の準備や運営において、それぞれの立場での責任と自覚を持って、展覧会(集団)のために何ができるかを考え、行動する姿が確認できた。(コンピテンシー: V. 組織や社会の一員として生きていく能力)

ところで、「愛大学生コンピテンシー」の策定について)のおわりの末尾には次のように書かれている。

この「愛大学生コンピテンシー」の枠組みを参考にして、自分自身の能力や現状を正確に把握し、強いところはより鍛えて伸ばしていき、弱いところは補い強化するという意識的に取り組んでもらいたいと思います。

コンピテンシーが、獲得した知識や技能をベースとして様々な状況や他者との関係性の中でそれを主体的に活用し、総体として自己理解のための能力とするならば、まさに状況展の活動は、参加者が自由意志の下、主体的・自発的に制作や展覧会に関わる中、「失敗も成功も含めて次の一歩につながる作品を展示する」と、その目的にも掲げているように、結果として、上述のコンピテンシーの5つの能力の具現化を試みた取組みと言えるのではないかと考える。もちろん、この取組みのみですべてのコンピテンシー能力が向上したとは言えない。しかし、作品制作を通じて絶えず自己と向き合い、それを発表する

ための展覧会を多くの他者とともに作り上げるという行為や過程は、一人ひとりを実際に成長させるための可能性を内包している。

3-2. ケーススタディB

デザイン専攻学生の参加は延べ7名で内2名が重複参加しており、学年では3回生の参加が多数である。本稿では、参加学生のデザイン制作と展示と展覧会後の影響や派生について述べていく。

(1) デザイン制作について

展示作品は、ブランディングデザインとイラストレーション、写真構成による編集デザインの3つに大別される。いずれも、2回生後期の授業課題であるヴィジュアルアイデンティティ計画(トータルデザインの提案を目指す)に含まれる内容の展開であり、デザイン関連科目⁷⁾の重複履修やデザイン専攻で取り組むプロジェクト課題の延長でもある。

参加にあたっては、授業の課題制作とは異なる自由なテーマに臨んでいるために、日頃の制作との距離はあっても、対象と真摯に対峙する姿勢を保ちながら十分に造形的な思考を重ねる時間を確保して、中途半端で付け焼き刃的な制作の出品は慎むことを伝えている。学生が制作途中に相談に訪れる頻度はまちまちだが、各々のテーマに対して、課題制作時とは異なる思い入れを込めて制作に向かっている。

(2) 展示について

課題制作においても、合評に加えて時には対外的な展示も経験しているが、状況展は他分野の専攻生と一緒に、また大学院生や卒業生や教員と共に本格的な展示空間で展示をし、デザインを「伝える」「魅せる」ことに挑戦する機会として緊張感を持って取り組んだ。

美術専攻の学生全員が教育学部美術研究会に所属するため、正課外活動として従来は2回生で学内展を開催したのちに3回生で学外展を企画していたが、近年は学外展の開催が減少傾向にあった。3年間の状況展は学生にとって、展示構成により作品と空間や作品相互が呼応して、バランスや迫力が生まれることを実感する良い機会となった。ここ数年は卒業制作展でようやく三次元的に掴めたことを、教員も交えて前もって経験する貴重な場であった。

(3) 展覧会後の影響や派生について

参加学生は、これらの経験により卒業制作において取り組むテーマ全体のイメージを従来よりも早い段階に構築することができるようで、自信と余裕を持って臨めており、総合的なデザイン提案に取り組む範囲も拡大傾向にある。

また、デザイン専攻の学生は展覧会広報のデザインを担当して展覧会の「顔作り」に関わっている。自身のデザインワークの経験としても重要な機会となっているが、一方で個人の制作に集中できない期間をどのように乗り越えるか、これを成長の糧としたいところである。卒業制作展においても同様の状況が出現するため、結果的にはデザインの実務に本来求められるスピードと精度が共に進歩することに繋がっている。

担当教員としての自身の制作分野はテキスタイル造形であり、主な制作の場が大学ではないために、学生が制作途中を常時見ることはないが、折にふれ、制作の原動力や姿勢は、好きやこだわりを超えた譲れないものやこととの存在によるものと示しているつもりである。テキスタイル造形の展示を見学したことが卒業制作テーマのきっかけとなった例もある。また、筆者の作品展示の補助をしてくれた専攻生にとっては、ヴィジュアルデザイン分野だけでは習得しにくい立体や空間に関する感覚や知恵を働かせる場ともなり、筆者の個展に際しても、こちらの意図を汲んだ自発的な動きで展示補助を担ってくれた。

(4) まとめとして

参加学生が、卒業制作における不安を払拭してモチベーションを維持すること、そして造形的思考を深めることの意味を自身の体験を通して探り始めたことが何よりの意義であろう。また、作品制作と展示に対する何らかの「自身のモノサシ」を見つけかかった者もいるであろう。実技であっても授業には残念ながら受け身の部分があり、準正課教育⁸⁾と位置づけて今回の取り組みを始めたものではないが、結果的には自己を律した主体的な学びが身につくという、学生にとって大きな意味を持つ成果となった。

むしろこのような取り組みに興味を示さない学生も存在するが、参加したい意思がありながらも参加しなかった学生には、課外活動との時間調整や体調管理を考慮し

た例もあり、現在の学生生活を取り巻く複雑な環境を憂慮する側面である。

教員と学生がフラットにという主旨には、ある程度の幅もあるが、これから各々に流れる時間がそれぞれに生まれた問いや疑問への答えらしきものを導くのではないかと考えている。このような機会に学生として参加する経験は得難いものであろう。筆者自身、学生とフラットな立場で展示したことは初めてであったし、ことさらに多くの会話を交わしたわけではないが、授業以外だからこそ背中伝えたいと思っている。また、授業で例年挿入する「深く掘るほど美味しい水が飲める」という井戸掘りの例え話がリアリティを持つ機会になっていれば幸いである。

アンケートには、参加時からの時間経過の違いに関わらず、卒業生として次に機会があれば参加したいという声が多く届いている。作品制作は、4年間の集大成である卒業制作展をもって終了するのではなく、むしろ始まりであるが、仕事につくとそのような機会が持ちづらく制作から離れるものも多く居ることは、赴任以来長年の懸案であった。卒業生が、業務としてのデザイン制作とは異なる作品制作と発表を重ねる機会があることを望んでおり、その結果が仕事に反映して良好な循環を生むことに繋がればと願っている。

造形芸術コースの終了にあたり、現在計画中の2020年の展覧会「(仮)創造の刻^{とき}-造形芸術コースの歩み」は、制作を続けている過去の卒業生諸氏に加えて、3回にわたる状況展の参加者が活躍する機会となるであろう。

3-3. ケーススタディC

次に学生 S の制作活動について着目してみたい。「状況 2016」展(前期)に出品した学生 S は、これまで授業の課題として作品制作を行ってきた経験があるだけで、自身で課題を見出して自主的に制作に取り組むことや、他の出品者とともに作品を展示するという経験を有していなかった。学生 S のアンケート結果をみると、このような自身の経験のなさに危機感をもっていたのか、本展への出品は卒業制作展へのステップアップを目的として、比較的積極的に参加をしたようである。

本項では、作品を展示することが作品を客観的に捉え直す機会になるという点に着目し、学生 S を指導する立場からみた学生 S の意識の変容や制作活動への影響を考察

し、作品を「展示する」ことの意義について言及したい。

知覚心理学者の James Jerome Gibson(1904-79)は、人間を取り囲む「環境」では、「環境」が人間などの動物に対して何らかの「価値」(情報)を提供しているという。ギブソンはそれを環境の「アフォーダンス」として提唱している。つまり、椅子は「座る」ことを「アフォード」し、ボールペンは書くことを「アフォード」しているといえるのである。さらに、事物を知覚することとは、その事物がアフォードするものを知覚しているということであり、それは「環境に存在する事物の「価値」や「意味」を直接的に知覚されることを示している」⁹⁾というのである。つまり、人間をはじめとする動物は、環境に存在する事物の色や形などを通して、その「価値」や「意味」を「言葉」を通すことなく、直接的に知覚しているといえるのである。それは制作された作品でも同様のことがいえるのではないだろうか。

制作する行為は、素材や道具とのかかわりを通して、できあがるもののイメージを生み出したり具現化していく行為ともいえる。その最中では、つくりあわしているものに夢中で視野が狭くなり、自身の行為やつくられているもの全体について意識が向きにくい。制作経験の少ない学生 S なら尚更である。作品を展示することは、狭くなった視野をリセットし、作品の形状や配置、展示空間とのかかわりなどをはじめ客観的に捉え直す機会となる。つまり、制作者である学生 S は、作品を展示することによって初めて作品がアフォードしている「情報」を感じ取ることができる、とみなすことができるのではないだろうか。また、作品のアフォーダンスを感じ取るのは制作者だけではない。作品を観に来た不特定多数の第三者もそれぞれが作品からのアフォーダンスを感じ取っているといえる。それは必ずしも制作者と同じ「情報」ではなく、それぞれの立場や経験などによって「情報」の受け取り方が異なる。こうした作品から受け取る「情報」の違いからも、自分にはない見方や感じ方を知ることができ、制作者である学生 S 自身の作品の捉え方に影響を及ぼすのではないだろうか。

実際に学生 S のアンケートをみると、設問【7】では本展での作品展示から、自分にとって成果や学びがあったと回答し、設問【8】では、「作品展示の経験がなかったので、その実際を学ぶ機会になった。」や「会場に展示

した際の作品のみえ方を理解し、卒制につなげられた。」という記述がみられた。従って、学生 S は作品を展示することで、作品のアフォーダンスを感じ取り、客観的に自身の作品を捉え直していたといえる。こうした作品を客観的に捉え直す経験は、その後の作品制作においても大きな影響を与えていた。

例えば展示作品（写真5）では、作品の左先端にいくにつれて、板厚を少しずつ薄くしている。そうすることで曲線のラインや全体の形状が軽やかに美しくみせることができる。本展覧会での展示を通して、作品を客観的に捉え直した結果、その先端の形状が作品全体に与える印象を大きく変えることに、改めて学生 S 自身が気づくことができた。先端の形状を成形していくためには、曲線になった木を鉋や小刀で削り出していかなければならない。これは、少し削っては全体の形状とのバランスを確認するということを不断に繰り返す地道な作業である。本展覧会後の制作活動では、先端の形状をより一層意識して、こうした作業を忍耐強く最後まで作り込む姿を見ることができた。



写真5：学生 S の展示作品

このように本稿の執筆を契機として、本展覧会を指導する立場としての視点で改めて振り返ると、作品を展示することが、制作経験の少ない学生 S の制作活動に対する意識に大きな変容を及ぼしていたことに気付いた。このことから、制作活動とは、つくっただけで終わるものではなく、展示することまでを含めたものとして捉えることが重要なのではないかと考えることができた。もちろん、本考察が学生 S のみを対象としているため、この結果が全ての学生に対して反映されるわけではない。加えて、本展覧会が初めからこうした教育的な効果を期

待して開催されたものでもないため、結果として、たまたまこのような変化を学生 S にみることができたという側面は否めない。しかし、学生を指導する立場として、展示することが客観的に作品を捉え直す機会になることを改めて認識できたことは大きな収穫であったように思う。

4. おわりに

本稿では状況展創設当初の理念をふまえつつ、正課外の活動が学生の意識の変容にもたらす効果を検証するために行ったアンケート結果をもとにその具体を探るとともに、「教員」の立場からみた状況展が与える「学生」への教育的効果について、当時の当該所属教員による省察等を通して考察してきた。このことから、状況展の実質について省察するためには、少なくとも次のような二つの座標軸が必要であるように思われる。

一つ目は、状況展というものが「創造の現場」に立ち会おうとする「自由意思」の交錯する場——他者の眼差しにより疑いが喚起され、芸術を芸術たらしめる原初の場、要するに「固定された自分の領域の外部に出ようとする、様々な可能性を内包した動的な自分の〈状況〉」を現前させる場——である（ありたい）という軸である。それは、たとえそれが不十分——他者が他者足り得ず、疑いが疑い足り得ない、静的に完結せざるを得ない自分の状況の現前——であり、誤差や齟齬の拡大を防ぎ得ないものであるにせよ、少なくとも参加者各位が正負両面において渴望し、あるいは羨望した、いわゆるひとつの規準ともいえるものであったと考えられるためである。

二つ目は参加者各位の意識の変容に関する軸である。それは（結果的に）学生に意識の変容をもたらした同展の（隠れた）教育的効果をその背景とするものである。というのも、一つ目の軸が表す状況展の特性が「自由意思」による「創造の場」への参加に還元されるということ、すなわち何らの教育的効果を企図するものではないということにあるにせよ、まさにそうであるならばそこでは他者の眼差し、すなわち参加者相互の影響関係による参加者各位における制作活動や出品に関する意識の変容を隠匿することは困難であるし、なにより不自然ですらあると考えられるためである（なお教員の意識の変容については本稿の趣旨ではないので割愛する）。

ここでは、以上の二つの座標軸が示しうる実質についてアンケートおよびケーススタディの結果等を再度見返しながら確認し、まとめとすることにしたい。

まず学生へのアンケート結果によると、参加理由については特段に他律的であったというわけではなかったし、また作品展示に関しても、9割以上の学生が何らかの成果があったと回答していた。特に自由記述の諸々に関しても、新たな意欲や刺激をもとに次の思考・創造へと向かおうとする各位の思いが書き込まれていたわけだが、これらをいわゆる「創造の現場」における他者の眼差しとの交錯によるものと解釈するのは希望的過ぎるであろうか。

一方、反省点としてもっとも多く挙げられていたのは「情報の伝達不足」であった。特に、場所の異なる2会場で最多の出品数（1会場あたり）だった「状況2017」では伝達・共有すべき情報量が多かったにもかかわらず、十分にそれが果たされていなかった旨があげられていた。その主たる原因としては、同展が2会場での展示となった故に教員が準備を先導することになったため、当初は出品者全員が表現者であると同時にキュレーターでもあることが前提とされていたにも関わらず、その意識を学生の中に形成することができず、教員と学生の間に意識のズレが生じることになったためではないかと推察されていた。さらに、今後、同質の展覧会を企画した場合の参加希望の有無に関する質問において、参加に消極的であった4名のうち3名が4回生で時間的余裕のなさを理由に挙げていたということだったが、そこには状況展が毎年開催されたことでその開催趣旨がうまく伝わらずに、参加すべきひとつの行事であるかのような誤解を生む危険性が潜んでいたのではないかと推察できた。

以上にみてきた反省点については、当初の「参加者が、〈自由意志〉によって〈創造の現場〉に立てたかどうか」という規準に鑑みたとき、「〈自由意志〉を履き違えた、弛緩した作品による形骸化の危険性」というよりもむしろ、ここでは（教員も含めた）互いにその視線を交錯し合うべき他者との相互関係のあり方こそが問われていたというべきではないだろうか。つまり当初は、例えば情報の伝達・共有により状況展という動的で柔軟な枠組みをともに構築することを企図していたにも関わらず、それが能わなかったために、少なくとも第3回展への省察

の一側面には、いわば「静的に完結せざるをえない自分の状況」が現前するという——つまり他者不在ということ——になってしまったのではないかと考えられるのである。

次にケーススタディからみていくと、ケーススタディAでは、それぞれの参加者が正課外活動として取組んだ本展覧会について、コンピテンシーの5つの能力と対応させつつ教育的な視点から考察が行われ、結果として、上述のコンピテンシーの5つの能力の具現化を試みた取組と言えるのではないかと結論づけられている。

次のケーススタディBでは、状況展の意義について、参加学生が（授業外の主体的な取組を通して）卒業制作における不安を払拭してモチベーションを維持すること、そして造形的思考を深めることを自身の体験を通して探り始めたこととしてまとめられている。

最後のケーススタディCでは、卒業制作展へのステップアップを目的として参加した学生Sの事例が取り上げられ、アフォーダンスの概念を用いながら、学生Sが自身の作品をいわば他者の眼差しに晒すことによって初めて得られるであろう「情報」を素直に受け入れたことにより、（結果として）そのありようについて捉え直すことができ、展示に関する考えを深めることができたとして、状況展の含みもつ教育的効果について述べられている。

以上のことから、状況展とは、一つ目の軸である「創造の現場」に立ち会おうとする「自由意思」の交錯する場である（ありたい）ということが——たとえその質が十全に保証されたものではなく、また決して小さくはない誤差や齟齬を生み出すことになってしまったにせよ——、作品制作および展示・発表に際して避けがたい他者との相互影響関係の立ち現れを促し、まさにそのことが二つ目の軸に挙げたような参加者一人一人を確実に成長させる可能性をもつものであったといえるのではないかと考えられるのである。

謝辞

本稿執筆にあたり、アンケート集計を担当いただいた当美術教育講座・上原真依准教授、並びに、アンケート

にご協力いただいた出品者の皆様に謝意を表します。また、第一回展、第二回展ではルーチェベルデ・オープンスペースの朝井章夫氏に会場を快く提供いただきました。第三回展の第1会場であった愛媛大学ミュージアム徳田明仁准教授には第三回展の展示を中心とした状況展の展覧会カタログの作成にもご尽力いただきました。同展第2会場の愛媛県美術館学芸員杉山はるか氏には美術館での作品設営等においてご協力いただきました。本展を開催する上でお世話になった皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

2) 2018、『状況展』、国立大学法人愛媛大学教育学部美術教育講座、愛媛大学ミュージアム

註

- 1) 鳥谷ひかる、2015、「状況 2015」展募集要項、「状況 2015」展実行委員会
- 2) 1991、『1991 京都アンデパンダン展パンフレット』、京都市美術館
- 3) 井上明彦、1989、「1989 京都アンデパンダン展」、『京都市美術館ニュース No.157』、京都市美術館、 p.3
- 4) 柄谷行人、2004、『トランスクリティーク』、岩波書店、 p.145
- 5) 同上、 p.173
- 6) 愛媛大学ホームページ：「愛媛大学学生として期待される能力～愛大学生コンピテンシー～」について
(<https://www.ehime-u.ac.jp/wp-content/uploads/2016/02/competency-1.pdf>)
(2018年6月13日閲覧)
- 7) 千代田憲子、2017、「デザイン教育における映像メディア表現に関する考察」、『愛媛大学教育学部紀要64巻』、 p. 285-293
- 8) 愛媛大学ホームページ
(https://www.ehime-u.ac.jp/campus_life/ex-study)
(2018年6月13日閲覧)
- 9) James Jerome Gibson、1995、「生態学的視覚論—ヒトの知覚世界を探る—」、サイエンス社、 p. 137

参考文献・資料

- 1) 愛媛大学教育学部美術教育講座ホームページ
(<http://www.ed.ehime-u.ac.jp/bijutsu/>)
(2018年6月13日閲覧)

